

文法・語義をめぐる一つの問題集(2)

水 谷 静 夫

前号に続いてまた若干の問題を、それも一見小さいやうでありながら、その実よく考へると大きな問題につながるものを提出し、その問題の在りかを解説したい。

念の為、前号で提出した問題の要点を記して置く。

題一 動詞の自他の弁明……国文法で動詞の自他の別を志すなら、徹底した再検討を要する。そのカテゴリの数は二つにはとどまるまい。また、形から言って他動詞と目せられるコスの「それに越した事はない」などの用法が説明し切れるやうな扱ひでなければならぬ。

題二 格助詞ヨの用法……題一との関係でヨを例に取ってみても、格助詞の用法の記述はまだ十分でない。細分だけが精密化ではない。見通しを持った精密化が望まれる。

題三 動詞と助詞との組合せ……前二題の発展として、動

詞とそれに伴ふ格助詞との組合せの姿を追求して分析する必要がある。これには語順の問題もからむ。日本語で述語に係る部分の語順は割合に自由とは言ふものの、構文要素の結合力の強弱がない訳ではない。題三はこれを究める一つの手掛りになる。

題四 連濁の有無による語義の違い (なほ「シンジュウ」は「シンヂュウ」の誤植)

題五 字音の種別による語義の違い
右の二題については、先づ、データ一覧の作成が望まれる。かなりよいリストが得られたとしても、そこから法則らしいものを導き出すのはむづかしいが、現状ではよいリストさへ得られてはゐない。さういふリストは、たとひ法則化に成功しないまでも、実用的には有益だ。

題六 形容詞語幹の複合の習慣的意味……〈形容詞語幹〉

〈名詞〉といふ構成の複合名詞の意味は、必ずしも、
〈形容詞連体形〉〈名詞〉といふ結合で表はされる意味と
同じではない。しかも 黒靴 黒い靴 なのに、赤靴
 赤い靴 は成り立たない。同類の語にかうした事が
起つてゐる。この辺から眞の語彙論が始まらう。

次に、今回扱ふ問題の要点を予告しよう。

題七 連体修飾語と被修飾語との間に割つてはひる他の要素……かうした語順は破格だとされる。さう認めてもよい。だが、この「破格」の用例は案外に多い。かゝる事象をどう扱はうとするかは、文法論の原理にまで響く問題である。

素……かうした語順は破格だとされる。さう認めてもよい。だが、この「破格」の用例は案外に多い。かゝる事象をどう扱はうとするかは、文法論の原理にまで響く問題である。

題八 語順の自然さ、語順変更の許容限界……前題を承けて、従来の文法論で説明が進んでゐない語順の問題を

今までとは些か異なる観点から問ふ。

右は主として構文論の領域に属する問題ではあるが、文の意味の論とも関係がある。意味論と更に深くかゝる問題として、

題九 親モ親ナラ子モ子ダ……日本語の慣用的な言ひ廻し

として、見掛け上、英語の“A is (not) A.”のやうな形をしたものがある。さういふ一類の表現の性質を

検討する必要がある。

今回は、取り立てては語義の問題を挙げてゐないが、以上の三題はどれも、意味論的考究抜きでは十分に答へることのむづかしいものだ。

題七 連体修飾語と被修飾語との間に割つてはひる他の要素

てはひる他の要素

所得税の天引き制度はサラリーマンの恨みつらみ怒りの的だ。

そこで次のやうな新聞記事も出ようもの。

(1) 税制調査会で、税率の引下げや課税最低限の引上げは、

毎年論議され、改正されつつあるが、天引き、そのものに

ついては、本格的な論議すら、出ていない。税社会の、そ

れはタブーのように。(毎日新聞、昭12・6朝刊)

国文法本来の仕方では「それは税社会のタブーのように」または「それが税社会のタブーのように」と、あるべき所。

連体修飾語とそれに修飾される体言との一続きが、文法上は一個の体言と同等になり、両者の間には(同じ体言に係る他の連体修飾語を除けば)他の構文要素が割り込めない——またはこれに相当する文法規則は、日本語だけでなく他の言語にも認められる通則だ。それを右の(1)は破つてゐる。しかも、読み手の感覚とし

ては、この表現がさほど不自然とは思はれない。

山田孝雄博士と言へば第一流の文法学者だ。その山田の講演の筆記文に次の例が見える。

(2) 東大寺の大仏殿といふあの木造建築は、現在の世界に於いて世界最大の木造建築であるといふ、あの東大寺の仏像は、しかしそれは源平時代に一回焼け、戦国時代にも焼け、元禄頃のあれは再建です。(山田孝雄『万葉集考叢』三三三ページ)
話し言葉ではかうした事がよく起る。しかし文筆家の書き言葉にも往々(または、かなり)現れる言ひ方だ。私はこの三年間で既に百例近い実例を集め得たが、作家では野上弥生子・今官一・五味康祐に多く、その他概して時代小説に散見する。恐らく、講談速記を漁れば相当数の例が集められようか——との印象だ。若干の例を追加引用する。

(3) 「(前略)但馬守が命運は最早我が手の及ばざるところ、さりながら、向後如何ようなる非難を世中浴びましよう、せめて殿は但馬が心底見届けてやつて頂きとうござる。同じ新陰流を修めたこの寺沢半平、安芸藩に在つて、せめてものこれが、武士の誼と存ずる……」(五味康祐『柳生武芸帳』下、新潮文庫六一ページ)

(4)(5) 忠左衛門は検分役よろしく、ゆっくりしりぞいて両者

の闘いを見物した。(中略)甚兵衛自身は相討ちを覚悟で、死ぬ気で打ち懸ろうが技倆の差は如何とも為し得ない。そう看取ったので手にかけた。味方に討たれるならまだ諦めがつこう……律義に義に殉じようとした氏家甚兵衛への、これが武士の饒けと忠左衛門は斬ったのである。介錯したも同然のつもりでいる。そういう忠左衛門は武士である。

(五味・殺人鬼『オール読物』昭44・1、七上)

(6) そんなわけで、人間存在の尊厳性からいえば、完全に屈辱のこれは歴史であった。(中野好夫『アポロとコロンブス』朝日新聞、昭44・7・21夕刊アポロ特輯)

(7) 私は自分の容姿に自信をもっている。まだ若い私は、あせることはなかった。男性にたいしても、お高くとまっているとも見えるほどの、つめたい態度で接したほうがよい。誰に教えられたのでもなく、しぜんに会得した技術なのである。そうすれば、男性はよけい燃えあがるものなのだ。うつくしい女性の、それは一種の狡智かもしれない。(陳舜臣『美貌の波紋』小説現代『昭44・1、二五中』)

(8) 想えば、一九三九年五月から九月にかけて、満州国とモンゴル人民共和国の国境線ハルハ川をめぐる日ソ両国が死闘をくりひろげ、日本軍の大敗に終わったノモンハン国境

事件の、今年は、ちょうど三十周年である。(中嶋嶺雄…
中ノ国境紛争はなぜ起ったか『文芸春秋』昭44・6、(四三下)

- (9) 右内は二人を案内して、また幾間か先へ暗い廊下を進みました。

「ここだ」

小峰右内の開けた唐紙の中を見て、二人は顔を見合せました。婆やの死骸とは比べものにならない、そこには刺戟的なものがあつたのです。(野村胡堂…二人浜路『銭形平次捕物

控七』角川文庫、一六六

- (10) 「(前略)後家とか聞いたが、夫は武家か？」

「下谷和泉橋通り、御徒三枝伝蔵組にて、七十俵五人扶持をいただいております竹内伊左衛門と申す者の、わたくしは妻でございます。夫病死のせつ、(下略)」(杉本苑子…雪うさぎ『オール読物』昭40・9、代表作時代小説昭和四十年版(下)

- (11) ニュースショーの

私はディレクター (毎日新聞、昭43・1・24朝)

- (12) (前段ニ典膳ノ人トナリ紹介) その典膳の、忠実な嘉平次は下僕である。(五味『薄桜記』新潮文庫(一四)

- (13) 以前に、典膳が知心流門弟と白昼に私闘した廉で咎めを

受けたのは、大目付高木伊勢守の実は謀らいによつたので
(五味『薄桜記』新潮文庫(三七)

- (14) とにかくこの話で、竜馬はあやうく忘れられることから

まぬがれた。京都東山靈山のかれの墓のそばに大きな碑ができたのもこの奇夢が喧伝されたあとだし、(中略)。その奇夢の、あるいは演出者だったかも知れぬ伯爵田中光顕は、
(司馬遼太郎『竜馬がゆく』回天篇あとがき)

長くなるから例はこの位でやめて、問題の所在を述べよう。以上の用例から分る通り、このいはば破格用法の多くは、フレーズ構造文法の規則の組

$S \rightarrow YZ \quad Y \rightarrow Z \quad Z \rightarrow Np \quad Np \rightarrow RtZ$

で生成される中間連系 $Y \rightarrow RtZ$ が期待される所に、語順が変って $RtYZ$ の形で現れる。前者なら入子構造を保つが、後者ではそれが破れてしまふ。この事は次の二つの理由で困った事だ。第一に、その言葉の文法構造が入子型であれば、さういふ文法は扱ひよい。もし2型文法に持ち込めば、2型文法の形式的性質はよく説明されてゐるから、大変好都合だ。第二に、フレーズ構造文法(またはそれと同等な文法)で右のやうな諸例を生成しようとする、1型文法によって語順変更をしなければならぬまいが、それに伴って構文論上のいやな事が起る(チョムス

キの五九年論文 On certain formal properties of grammars 参照)。従ってチヨムスキなら変換文法規則に訴へる所だ。その方針で臨むか否かは別にして、どんな場合にこのいはば破格が起るかを調べる事は、かうした事象の究明の為には勿論（そしてそれは変換文法規則を作るのにも欠かせないが）、およそ構文法を組み立てる際に十分考へて置くべき原理的事柄への示唆ともなる。さういふ用意無し議論では、旧来の文法論の甘さが克服出来ない。またこの種の破格がさほどの不自然さも感ぜず受け容れられる所に、形式言語とは違った自然言語の味があり、文法論の範囲を脱け出て人間の言語の在り方を考へる一つの問題になり得る。

そこまで行けば言語哲学の領域だ。しかし哲学が科学的であつてならないといふ理由はない。いや寧ろ哲学は科学的認識と両立すべきだ。さうした言語哲学が全く欠けてゐる状態では、言語研究は連糸いぢりのパズルに堕してしまふ。但しこの種の議論はここではこれ以上しない。言語事象に即しないで更に論を進めるのは、右の哲学観に反するからだ。

さて、先に引いた例(1)―(4)、(6)、(7)、(9)―(11)では、Yの中核は代名詞だ。(5)や(12)では人名なので、このグループに近い。(8)もまた「今年」といふ指示詞なので、代名詞に仲間入りさせてもよからう。(9)を除けばいはゆる主語である事も、注目に価する。だが

(13)や(14)は右の共通性を持たないから早急な帰納は慎むべきだ。形の上からの特色では、Yの前（そして後）に読点が付たれてゐるか否かにも、目を注がなければならぬ。読点の打ち方はかなり気分により左右されるけれど、この問題を考へる手掛りにはならぬ。更に前掲諸例が、(9)と(13)を除いて「AハBダ」型またはそれに相当する構文の、そのBに関係して起つてゐる事も、見逃してはなるまい。これらの点を統計的に追ふなら、改めて、きちんとした調査計画に基づき統計的検定・推定に耐へる計量的調査を行ふ必要がある。

Yの中核部が体言の場合（先の例にはさうしたものが多かったが）、YはZXのやうに書き替へられるので、RtZXZダにおいて連体修飾のRtがYの中核部の（つまり左の）Nに係るとも解せる。さう解すれば、今問題にしてゐる諸例は作りのよい連糸となる。かういふ解し方は、次の(15)では成り立つかに思へる。（補注）

(15) 眉の女のように淡い、鼻すじのおつた悠之丞は、美丈夫である。（五味『柳生武芸帳』上七）

だが、同じ作家の(16)や(17)と見比べれば、この解は採れない。

(16) （紀文ノ逸話紹介ヲ受け） そういう紀文は男である。（五味『薄桜記』三四）

(17) 何度も書くとおろ、そういう「大べらばうな」腑抜け侍

どもを家老にして平然たる内匠頭は主君だった。(同三)

紀文が男、内匠頭が大名である事は先刻承知だ。だからこゝでそんな判断を述べてゐるのではない。また、例へば(8)をこの流儀に解すると、今年千九百六十九年が実は千九百三十三年だといふ誤りに陥る。もっと強い否定の根拠は、Yの中核部がNではなくその為RtをYには係けられない(13)、(14)の存在に求められる。しかも(13)はやはり五味の用例だ。以上によって、我々の問題が誤解から出た幻の問題ではない事を、確かめ得た。(11)で「私はテレビショアのディレクター」としないのは、二行に割った見出しの字配りの美的効果を狙ったからだ、美的配慮にしろかうした語順が採れるといふのは、この語順が、誰が見ても誤った日本語だとは言へない——つまり許容出来る程度の変異である事の、裏書となる。しかもこれらの語順の成因を、近來無難を加へた日本文に求めるといった調子で、斬り捨てる訳には行かない。既に契沖の『百人一首改観抄』に見える左の行文(全集六、三三三)は、この種の用法を準備するものとも解せられる。

詩は十月といひ、此歌は秋の末にあれと、さるほととの和漢にかはる事おほし。

となると、題七として課せられるのは、先づ、かゝる語順を採った諸例での、それに伴ふ形式的条件を明らかにする事、次いで

は、かゝる語順を採らせる成因に解釈を与へる事である。後者に對する見込みを述べれば、問題の連系のRtはその前文の内容を承けてをり、そのサスペンスを、いはば正常な語順 Y Rt Y のYによって中断されたくはないといふ、表現主体の心理的要請による事だらう。さうでない場合には、Yが挿入的に補足されたものと見られる。先に講談筆記を調べればと言って置いたのは、この解釈を見越しての事だった。

この試みの解釈が正しいとしても、なほ問題は残る。第一に、

(18) 男のちからにたよらないでは生きてゆかれぬ女……おふじは、そうした女である。(池波正太郎『啞の十蔵』オール

物語43・1、一三上)

は、五味なら

男のちからにたよらないでは生きてゆかれぬ、おふじは女である。

と書くだらう。池波が(18)のやうに書き、右の語順になかった、あるいは一層適切には、五味が(16)(17)などの語順を選んだ、その分れ目が形式理論として算法化出来るだらうか。第二に、

(19) 「よく聞け竹念坊、おまえの見たのは天人でも女菩薩でもない、とんでもない、あれは悪魔だぞ」(山本周五郎『牛

『オール読物』昭32・7、代表作時代小説昭和三十三年版三三)

の「あれは」に先立つ二つの読点は文の切れ目だ（と私には感ぜられる）が、「あれは」の直前を文末でないと解すれば、こゝに問うてゐる型の連糸となる。そのどちらなのかを見分ける決定的手続が作れるだらうか。

私としては、文法論の形式化をそこまで進めるのが夢だ。この夢は見果てぬ夢かも知れない。いや、その公算の方が大きい。だがそれを志さずに変換文法をひねくつても、それだけなら新たに *ad hoc* な規則を加へるに過ぎないと思はれる。

題八 語順の自然さ、語順変更の許容限界

題七で取り上げた語順はいはば破格だ。作りのよい連糸を、かつそれだけを生成する文法で、そんなものまで面倒見切れるかと言ふのも、十分に考へた上の事なら、これは一見識だ。言語資料をあるがまゝに受け容れようといふ自然主義は、事実在即しない天降りの理屈を排した点で、言語研究にとって積極的な価値を示した。だが無反省にこれに寄り掛ると、悪しき客観主義に陥り、遂にはどんな言ひ廻しも没批判的に容認する事になってしまふ。構文論における作りのよさの重視は、文法本来の価値判断的側面の復権だとも言へよう。これも行き過ぎると悪しき規範主義に陥る結果を招く。

前題に關聯して再び語順の問題に目を注がう。

語順の問題では、例へば

昨日 神田で 本を 買った

の初め三文節の入れ替へで可能な、他の五通り、即ち

昨日 本を 神田で 買った

神田で 昨日 本を 買った

神田で 本を 昨日 買った

本を 昨日 神田で 買った

本を 神田で 昨日 買った

もすべて作りのよい文だ。かうした事を、日本語での語順は自由だと言ふ。この種の自由さにも統計的傾向性はある。佐伯哲夫はこれに關し精力的な労作を物した。佐伯がさうだと言ふのではないが、だが語順の問題はかういふ事には尽きない。

大まかに言へば、係り先との結合力が強い要素は係り先の近くに据ゑられる。右の類ひの表現では、カフの目的物を表はすホンの結合力が最も強く、従つて所を表はすタンダや時を表はすキノフよりも、カフの近くに置かれる。動詞カフの語義からしても、目的物は顯在的・潜在的に必須の意味成分だ。これに対し所や時はいはば随意的な成分と見られる。時も所も純論理的にはその随意性に甲乙は無いが、日本語の慣しとして、両者を並べるには時

の表現を先に置く傾向がある。英語の

The conference will be held at Harvard in 1971.

と比べれば、時・所について逆順のやうだけれど、述語動詞からの距たりといふ観点では、揃ってゐる。徒らに現象面を感覚的に捉へるだけでは、この事を見逃しかねない。この観点からの日英両語の共通性は、或いは人類の思考法の普遍的傾向につながるかも知れず、なぜさういふ共通性が見出されるかの解釈についても仮説的解釈を試みることは出来る。が、それを当面の問題にはしない。次に、「本を昨日神田で買った」のやうな語順は、「昨日神田で本を買った」に比べれば、「本」を強調してゐる、少なくとも関心の力点が時・所・物の間では物に置かれてゐるやうに感ぜられる。これは、通常の結合力の強弱による排列に背いてホンを先に押し出した事により、強調の効果を生じたのだと説明出来るやう。

右のやうな扱ひ方だけが語順の研究ではない。題八の問ふものは些か異なる。

時枝文法論ではデアルを一個の助動詞と認めるが、山田文法論や橋本文法論ではデとアルとの二語と見、この場合アルは用言とされる。両様の説にはそれぞれの長短がある。

犬でこれはある

を非とする時には時枝説が有利だが、

これは犬でハあるが　これが犬でサへあれば

を可と認める際には工合が悪い。山田説・橋本説はその逆だ。橋本説ではダに当るデアルのアルを補助用言と見るらしいが、或用言がそこで補助的用法に従ってゐるか否かを見分ける手続は確立してゐない。それ故「犬である」の「犬で」と「ある」との間に他の要素が割り込めるか否かについて、明確な判定を下し得ないやうに思はれる。

理由づけまで求めないとして、デアルやデナイを割って他の要素が入り込むのは異常だと感ぜられる。しかし例が無い訳ではない。例へば、

- (1) この焦躁による普遍な行為の例外で、英才白石もなかった。(吉川幸次郎・鳳鳥不至『新潮』昭44・7、一九)

- (2) 先だってこの作者が川端康成の「眠れる美女」を評して、あれは睡眠薬中毒の作品だと断定したのを、私はナルホドと肯いたものだが、そういう作者でなければ書けない作品でこれはある。(平野謙・12月の小説、毎日新聞昭・43・11・30夕刊)

- (3) 同時にまた、斬殺輪番制という規律を無視したのも、それはあるのだが、奉行でさえ見て見ぬふりをしているの

は、（状見丘太郎…血は銭の色『現代小説』昭41・4、代表作時代小説昭和四十一年版、三三）

- (4) たかが遊女のためだが、そのために火の中をくぐることも辞せぬ、そういう男で、継之助はありたいとおもっている。（司馬『峠』前編二〇）

これらは主語が割り込んだ例だ。(1)や(2)は引用が短いから右の箇所だけでは分りにくいかも知れないが、この異常が生じた理由は四例とも、題七で試みた解釈と同様だと、解せられる。更に

- (5) しかし、そうした愁いを湛えた新七郎の表情は、いよいよミチの乙女心を掻き立て、募らせた。と言っても、源右衛門の言葉を藉りれば埒を踏み越えたものではなく、みだらな関係では無論ない。（五味…柳生連也の敗北『オール読物』昭43・2、一三上）

- (6) 連也の按じた不安は別のほうにあった。新七郎ではもうない。小隼人である。（同二三中）

では副詞が割り込んでゐるが、成因はやはり同様に解せられる。

かうした語順は、デアル・デナイのアル・ナイを単に用言と説く限り、在来の国文法の理論では許容せざるを得ない。その他にも、既成国文法の規則は措いて、私の言語感覚では(5)(6)は(1)―(4)より抵抗が少ない。読者諸氏ではどうだらう。もしさうなら、主

語の割り込みの方が副詞の割り込みより合文法性を破る度合が大きい事になるが、語順の自然さ・不自然さをどのやうな方法で認定（更には測定）するかが、問題になる。

再び作りのよさに話題を戻して、単にデアル・デナイだけの事なら、文法規則を如何様にも作って切り抜けられる。それはそれとして、類例はこれまた案外に多い。連体修飾語との間の語順で、

(7) これも上原には、腕のたしかさにふさわしいだけ鑑賞眼も高いことの、いわば証拠になるように思われた。（丸谷才一…年の残り『文芸春秋』昭43・9、三三上）

- (8) 「協議して決めることに東大も同意したのだから、協議が整わない場合は中止」というのも、チエ者らしいこの人の作った筋書。「意外」ともいえる入試問題の結末の、いわば演出者だった。（朝日新聞、昭44・1・24夕刊）

- (9) それは、翌四十年にかけて経済界を襲った、大型倒産時代の、いわば口切りでもあった。（大野力…このみことな

ロ経営者『文芸春秋』昭44・2、一五上）

私はこれらには抵抗を感じない。イハバを通説通り副詞と考へれば、どれも作りの悪い連糸だ。それなのになぜ抵抗を感じないかと考へた結果、次の事に気づいた。もし副詞と認めて入子を破らないやうにイハバの位置を移せば、(7)では「腕」の前に、(8)では

「意外」の前に、(9)では「翌」の前に据えなければならないが、そこに移すとイハバの係り先がそれぞれ「腕」、「意外」または「結末」、「大型倒産時代」などと紛れてしまふ。だから本旨を紛れなく伝へるには(7)―(9)における語順がふさはしいのだらう。(たとひそれが書き手の意識的に企てた事ではないにしてもだ。)もしさうなら、こゝに新たな問題が生ずる。それはイハバを副詞として置いて構はないかといふ問題だ。品詞の決定に迷ふ語については、後の機会に言及するつもりだから、今はこれ以上に深入りしないが、大いに論のあるべき所だ。(7)―(9)と似た理由で副詞の位置が通常と違ふ例に、例へば

(10) 十五人の刑事たちは、毎日のように歩きまわり、その黒幕である工藤陸郎が、「新淀川」「新神奈川」二駅の、用地買収事件で、頂点に立つ人物であることの、は、ば、裏づけをとっていたのである。(梶山季之『夢の超特急』三)

(11) ついに天下を統一して、中国や楚・呉・越の地はもとよりのこと、南越、すなわち今の広東、广西のへんまで征服し、前古未曾有の大帝国を築き上げた。満州をのぞく、は、現在の中国の版図だ。(海音寺潮五郎・英雄総登場『オール読物』昭44・7、八〇中)

がある。但しこれらは不自然に感ぜられる。(10)ではホボを「裏づ

けを」の後に廻すのが、私には自然だし、文法にも叶ふ。(11)では「現在の中国のは、ば全版図だ」と改めたい。副詞は英文法などでもごみ箱の観があるが、それを据える位置について国文法ではもっと深い研究を要する。係り先となる語との關聯でさうした研究を進めれば、副詞の分類が従来よりすっきり行くかも知れない。即ち副詞に限らず、注意のいる例を、少々追加しよう。

(12) 本当に花見をたのしむには、いまのように穏かで、品々も豊かに出まわる年が何年か少くともつづかなければならない。(辰邦生・嵯峨野明月記『新潮』昭43・9、表下)

(13) やめたり、焼けたりして、もう講談の定席は一軒もなかった。

福松は、やめたことにも腹が立った。やめさせるようにした世の中にある。

焼けたことにも腹が立った。焼けるようにしたや、っ、ぱり世の中にある。(安藤鶴夫『巷談本牧亭』六七)

(14) 日本式のように長たるものは何もせず、また「有能領域」にある下のものに仕事をしてもらうのが真に仕事をする方法である——ということに「ピーターの原理」に従えば、なるのである。(竹村健一・「ピーターの原理」の皮肉と真実

(下、毎日新聞、昭44・10・10)

(15) 「あたしの母は、K市の県会議員の、いまの言葉でいうと、愛人だったんです」(大岡昇平…愛について、第三話、毎日新聞、昭44・8・12)

(16) そういふ明日の決闘を覚悟で、乗込む、わずか一両日の云つてみれば縁である。(五味『柳生武芸帳』上四五)

(17) 武蔵と兵庫介は、その石垣に添つて前後を競つた。殆んどそれはもう、駆け出すというに庶幾い。(同、下三〇)

(18) かれらは不愛想に言い、やがて三岡をつれ出した。足かけ五年、近所の景色をさえみていない三岡にとって、あやうく駆け出したくなるほどこれは外出そのものが歓喜であった。(司馬『竜馬がゆく』回天篇四〇)

(19) (前略)と考える傾向。ヨーロッパでは近代音楽同様、近代演劇もすでに完成しているではないか、という定説をも、これは疑う立場である。(福田善之…天野貞祐氏のことば、朝日新聞、昭44・6・24、教育欄)

(20) 猪村は準備した。三日間だけ転がす権利を得た三百万円の現金を、机にしまった。(中略)たとえ三日間でもコールに回せばいくらかの利はあるが、その利に、葉子はまさる女と思えた。(三好徹…蕩す『オール読物』昭43・2、三〇中)

在来の文法説では、(12)、(14)、(17)―(20)を作りの悪い連糸とする謂はれがない。(13)(15)(16)も、その説く所を押し詰めて行けば、やはり反文法的とは言ひ切れない。これらの附点部分がまさにこの位置に据ゑられた事——それにはそれだけの、書き手の思考上の理由があると思へる。但し私の感覚では、(17)まではさほど不自然ではなく、(18)からはかなり不自然だ。かやうな境界は人によって様々だろう。さうだとしても、作りのよさ(即ち合文法性)と自然さとは必ずしも並行しないやうに思へる。両者の関係をどう押へるかが、文法論の根柢に響く。繰り返し言はう。文法がその言語系の文かつそれだけを生成する仕組なら、語順変更の許容限界もまた、たとひ陰にでも、規定し得なければならない。理念上の文法は、文であるか否かを決定する算法の論理機械であって欲しい。但しこの論理機械の出力が言語感覚上の自然さと完全には合致しないかも知れない。ミクロには論理機械との同等性が保証し難い人間の、これは大きな問題だ。

和文の語順研究には確かに不足が多い。説明すべき事柄の手掛りとして、今後も統計的追求が必要だ。だが統計的規則性を見出だすだけでは足りない。それを見渡す視点がいる。その視点は広義の論理とも相渉る。さうした研究の出現を期待する。

補足としてのヒント

今回取り上げたやうな、いはば異常な語順が、なぜ生じたかを推測する手掛りとして、次の用例を引いて置かう。

- (1) (2) つい眼の前に、雪女^{ユキメ}は立っていた。

雪女は毛皮フードつきの、ウエストで締まった長外套^{シムイバ}と、長い柔かい革の長靴をはいていた。赤い肩章には雪が積っていたが、端や角からのぞく星や金条は、かなり華やかだった。国民政府軍女将校の、それも相当に高い階級の制服に、それはちがいがなかった。(宇能鴻一郎・雪

女の贈り物『オール読物』昭41・12、元号中下)

右の二箇所の附点部分は、全く省いてしまっても構はない。但し(1)と(2)とでは違ひがある。(2)を残しかつ位置を変へて「国民政府軍」の前に移す事は許される。だが(1)を残す以上、それを据ゑる位置は原文通りでなければならない。一方また、両者には共通性もある。それは、かなり入り組んだ内容を伝える文で、今何に目を向けてゐるのかを、重ねて注意する為の指示語だといふ点だ。指示語だから、当然、(時枝の用語法に従ふ)客体界の何かを指し表はしてゐる。だがそれは表現主体とのかゝはり合ひにおいて指すのだ。今回問題にした部分は、客体界の事象について述べる

と言ふより、それを述べる主体の表現態度を示す表現だ。(2)が文頭に置かれず原文の位置に來たのは、既に題七の(18)の前にも述べた通り、(2)に先立つ部分が前文と内容上密につながり、「それは」を文頭に置いてこのサスペンスを弱めるにしのびないからだ、と解してよからう。例(3)もこの事を暗示する。

- (3) どの高校の教室にもいる。教室の中に平然と他の世界の匂いを持ち込む生徒が。ミルクと汗とが混つたやうな教室の匂いの中では、彼は反つて全く匂いがないやうにも感じられる。甚多の教室ではそれがおさだつた。《おさ》という仇名は(下略)(氏原工作…きみの問はなにか『新潮』昭43・3、三上)

(2)も(3)も連体修飾語とその被修飾語との間に割り込むのではないから、連系の作りを悪くしてはゐない。しかしそれはたまたまさうだといふだけの事だ。同様の手法が、連体修飾語を述べ終へこれの被修飾語であると共にその文の述語である部分に述べ進まうとする時に、使はれるといふのも、全くありさうな事だ。それが題七の場合だ。但し、自然に起り勝ちだとしても、この心理的法則性が直ちに構文の規則になるとも言ひ切れない。安全に言へるのは、一文の構文を考へる時でさへ、前文(時には後文)の姿まで勘案しなければならない場合があるといふ事だ。

(1)の方は、連体修飾語の次に割り込みながら、入子構造を破らない。それは「国民政府軍女将校」と「それも相当に高い階級」とが共に「制服」に係り、しかも「それも」の係り先が「高い」と分析出来るからだ。類例として(4)を引く。

(4) 「これは、御奉行所よりも、いっそ長谷川平藏さまへおとどけしたがよろしかろう」

と、いうことになり、親族代表の神田・旅籠町の、これも乾物問屋の主人公で伊豆屋専右衛門が清水門外の役宅へ駆けこんで来たのである。(池波・妖盗葵小僧『オール読物』

昭43・11、空中下)

行方不明になったのも伊豆屋も共に店主だ。(「主人公で」のデの用法に別の問題があるが、こゝには直接関係しない。)

題九 親モ親ナラ子モ子ダ

どの言語にもその言語に特有の言ひ廻しがある。その中には、普通の文法説や語釈ではどうも形づかない場合がある。

(1) 俺は俺だ。

(2) お前もお前だぞ。

などがその例だ。これを英語に直訳して、「I am I.」とか「You are also you.」とかしても、意味は一向に伝はらない。かうし

た類ひの表現を「慣用句」と呼ぶが、さう名づけてみたところで問題の解決にはなっていない。表現の形だけの似寄りで言へば、

(3) 気が気でない。

も、さうだ。が、(3)は(1)や(2)とはかなり違ふ。先づその事を明らかにし、その上で(1)(2)の類ひに関する問題を述べよう。

一見すると、(1)(2)は「AがAだ」といふ同一律を表はす命題の形を取ってゐるし、(3)はその否定命題の形を取ってゐる。内容的にもさうなら、前者は恒真命題だから日常の会話などではわざわざ断るまでもなく、また後者は矛盾命題だから恒偽であってさういふ主張は誤りを言っていることになる。しかし(1)―(3)はどれも積極的に実質上の意味を伝へる和文だ。そして、これから述べる通り、この種の表現の存在は日本語の論理的欠陥といふ事の証拠にはならない。それは同一律の表明でもその否認の表明でもないからだ。

(3)は大いに気をもめる事を表はす言ひ廻しの一つだが、この形がなぜさういふ意味になるかは、割合に考へやすい。例へば「今の私の気の状態」が「平常の私の気の状態」でない事を言っているの、第一の「気」の指す対象と第二の「気」の指す対象とは別物だから、何ら矛盾した事を言っているのではない。かうした表はし方が厳密性を欠くと難ずるなら、さうだと認めよう。だが

日常語が常にその水準での厳密性を保たなければならぬとする
と、大変煩はしい事になる。母親の嘆き

(4) 叱らなければ勉強しないんですからね。

を、不用意に対偶命題に直すと、では

(5) 勉強すれば叱る

のかといふ訳だ。(4)(5)の間の逆説めいた関係は、日本語が必ずしも主語・目的語やテンスを明らかにしないといふ原因で起つては
るない。筆者は右の逆説めいた話を、別々の折に二人の米国婦人
に(6)(7)の形で聞かせて、やはり混乱に陥らせた。

(6) If I don't scorn my son, he doesn't study.

(7) If my son studies, I scorn him.

この問題は六八年度の国語学原論の講義で扱ったし、『解釈と鑑
賞』の昨年五月号に書いたしするから、詳しくは述べない。今は
(3)の正確さを難ずるやうな人への警告として触れるにとどめて
おく。日常会話では、時の前後関係を常に表現面にあらはに出す
とは限らない。(6)(7)に見るやうに、テンスの六つのカテゴリを持
つ筈の英語でも、時とテンスとの一対一の対応は無いから、事情
は五十歩百歩だ。さて(1)や(2)の和文について、では(3)の正常な聞
き手がするやうに、時に関連する通例・特殊といふ因子を持ち込
んで理解しようとすれば扱ひ切れるかといふと、さうは問屋が卸

さない。だから、(1)や(2)は(3)とは異なると言ったのだ。

(1)(2)は肯定の形、(3)は否定の形だから、その影響がありはしな
いかと心配する人の為に、次の例を追加しよう。これは筆者が子
供の頃に父から聞いた話だ。(私の父はメリヤスの製造販売をし
てゐた。)第一次大戦で雑貨の輸出増による好況に浮かれてゐた
業界は、その後のパニック(人は「ガラ」と呼んだ)に痛めつけ
られた。(父の店も倒産に見舞はれた。)血眼で集金に飛び廻りま
した債鬼をはぐらかす。かうした最中^{さなか}にあった実話だが、借金取り
に坐り込まれた或店主が、

(8) 出せる金が無くはない。金は金でもこれだッ。

と言って、七首を疊に突き立てたといふ。この「金は金でも」即
ち「金は金だ」は、やはり(1)(2)の類ひとは區別出来る。名詞カネ
の多義性を利用したものだからだ。(8)との形の似寄りで

(9) 親が親でも子は子だ。

を考へてみよう。これは(今時、はやらないが)親が「親らしく
ない親」でも、子は「子らしい子」であるべきだといふ主張で、
初めのオヤ・コと次のオヤ・コとの指す物が違ふから、(3)の類例
になる。

ところで(9)からの聯想で、また、

(10) 親も親なら子も子だ。

を考へると、(10)には、(3)(9)や(8)に使った説明法が通用しない。まさしく(1)(2)の類ひだ。そこで、我々がこゝに問題にしようとするのは、次のやうな一類の言ひ廻しだ。形を揃へる為に「親・子」に統一し、意味の注記を括弧内に添へておく。

親は親だ (他の事はともあれ、……)

親も親だ (他にも同類があるが、……)

親は親、子は子だ (親と子とが異類だといふ対比)

親も親なら子も子だ (〓親も親、子も子だ)

こゝまで述べて来れば、筆者が何を問題にしたいのか推察出来る人も多からう。だから問題点の指摘は簡単にする。第一点は意味の問題で、この類ひの言ひ廻しの意味する所を出来るだけ正確に記述すればどうなるか。無論「AハA」「AモA」で意味に違ひがある。そこまで押へなければならぬ。第二点は、その意味と構文との関係を明らかにせよ。この種の問題には(通例)交換文法を使うのが便利だ(と言はれる)。もしこれに同意するなら、これらの表現を導く深い構造とその交換規則とを、ad hoc ではない形で示せ。(この点については、筆者自身は相当に悲観的であり、もしかすると交換文法の表現力の限界を示すものかも知れないとさへ考へてゐる事を、言ひ添へる。)第三点は、この類ひの表現に限らない文法的な問題だが、これらでの「は」「も」の

用法も含めて、係助詞ハ・モの使ひ分けの様を明らかにせよ。ここでは(9)のガとの対比も問はれよう。また、意味論とも関係させなければなるまい。第四点は、第一点とは別の面での意味の問題だが、先に「親も親なら子も子だ〓親も親、子も子だ」としておいた事について、次の点を問ひ直さう。この扱ひは「AカツB」といふ連言と認めたものだが、「モシAナラB」といふ含意(条件づけ)とは認められないか。更に広く、論理記号のAやつと日本語の表現との対応を見定めよ。

言語事象に関する多くの問題がさうではあるが、この題九は特に、言語研究の色々な分野と交渉する。しかも、例外的かに思はれる見掛けに反して、日本語による表現の中核部とかゝはる問題だといふ事を、注意しておきたい。

【補注】 (15)とは違ひ確実に成り立つ例を補足しよう。

(20) 泥にまみれたそれは急には首と見わけがつかなかった。

(海音寺潮五郎『天と地と』角川文庫上二六)

(21) これで解決法が教えられた気持で、上野と下平との調停にかかったが、こじれにこじれているこれはなかなか解決がつかない。(同、下三三)